病弱剣士も異世界から来るそうですよ‼？

紅茶_uva

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

沖田総司。幕末の京都を中心に活動した治安組織、新選組の一番隊隊長。

剣客集団としても恐れられた新選組において、一番隊は剣豪ひしめく新撰組の中でも最精鋭の部隊で、芹沢鴨暗殺、池田屋事件など常に新撰組にとって重要な任務をこなしたといわれ、その中でも最強の天才剣士と謳われた。

だが、病により床に伏し、局長や副長など新撰組の仲間達と共に最後まで戦うことは叶わず、没した。

その事を彼女は悔いており、新選組の隊士としては失格であると思い込んでいる。

――――同時に、彼女は生前果たしたくとも果たせずに終わった彼女の悲願を成そうと決めた。

「最後まで戦い抜くこと」。これが彼女の願いであった。

目　次

第一話　沖田さんも異世界に来るそうですよ！ ―― 1
不憫な黒うさぎ ―― 6
ギフトゲームをするそうですよ！ ―― 12
階層支配者に喧嘩を売るそうですよ ―― 23

第一話　沖田さんも異世界に来るそうですよ！

沖田総司。幕末の京都を中心に活動した治安組織、新選組の一番隊隊長。

剣客集団としても恐れられた新選組において、一番隊は剣豪ひしめく新撰組の中でも最精鋭の部隊で、芹沢鴨暗殺、池田屋事件など常に新撰組にとって重要な任務をこなしたといわれ、その中でも最強の天才剣士と謳われた。

だが、病により床に伏し、局長や副長など新撰組の仲間達と共に最後まで戦うことは叶わず、没した。

その事を彼女は悔いており、新選組の隊士としては失格であると思い込んでいる。

――同時に、彼女は生前果たしたくとも果たせずに終わった彼女の悲願を成そうと決めた。

「最後まで戦い抜くこと」。これが彼女の願いであった。

「あぁ、最後まで近藤さんたちと戦い抜きたかったなぁ」

少女は呟きそして思う自分が病弱でなければもっと仲間と戦えていたのではないかと最後まで戦えないのは新選組として失格だと。

六畳間の和室の中央で床に伏している少女はそんなことを考えていた。

すると何かの気配がしてその方向を向くと一通の手紙があった。

「一体誰でしょう今の私に手紙を送る人なんて」

不思議に思ったがそこに手紙があるのはまぎれもない事実少女はその手紙を手に取り封を開けたそこには

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能ギフトを試すことを望むのならば、己の家族を、財産を、世界の全てを捨て、我らの”箱庭”に来られたし』

突如視界がひらけ空に放り出された気配がする方向を見れば同じように空に放り出され自由落下している少年少女たちがいた

あぁこれは夢かもしくは死後の世界かありえない現状に考えることを放棄しかけたが自分の体に違和感を感じた。
その違和感とは床に伏していた時と違い体の調子が異様に良いのと自分の服装が和服にブーツという病に侵されていた時と全く違うものだったからだ。
それと共に自分の真名をむやみやたらに明かしてはならないと言う言葉が頭をよぎった。
そんなことを考えている間にも落下は止まるわけもなく湖に四つの水柱が上がった
「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺り込んだ挙句、空に放り出すなんて！」
「右に同じだクソッタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」
「……。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」
「俺は問題ない」
「そう。身勝手ね」
「……危ないと思うけど」
二人の男女はどうやら気に入らなかったらしい。互いにフン、と鼻を鳴らして服の端を絞り始めた。
その後ろに続く形で、もう一人の少女が上がって来る。同じ様に服を絞る彼女の隣で、三毛猫が全身を震わせて水を弾いた。
少女は服を絞りながら、辺りを見回す。
「ここ……どこだろう？」
「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」
適当に服を絞り終えた少年は、軽く外に跳ねた髪の毛を掻き上げる。
「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」
「そうだけど、まずは〝オマエ〟って呼び方を訂正して。――私は久遠飛鳥よ。以後気を付けて。それで、そこの猫を抱きかかえている貴

女は？」
「……春日部耀。以下同文」
「そう。よろしく春日部さん。次にハイカラな和装に身を包んだあなたは？」
少女――飛鳥に指摘され、三人に視線を固定する。
三人とも一応の聞く体制は整っているようだ
「セイバーです」
「ええ、よろしくセイバーさん。…最後に、野蛮で凶暴そうなそこの貴方は？」
「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれよお嬢様」
そんな十六夜を、私は興味深そうに見つめてる。
「取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」
「ハハ、マジかよ。今度作っとくから覚悟しとけ、お嬢様」
心からケラケラと笑う逆廻十六夜。
傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。
我関せず無関心を装う春日部耀。
自分の体の調子を確かめるセイバー。
そんな彼らを物陰から見ていた黒ウサギは思う。
（うわぁ…なんか問題児ばっかりみたいですねぇ…）
召喚しておいてアレだが……彼らが協力する姿は、客観的に想像できない。黒ウサギは陰鬱そうに重苦しいため息を吐き出した。
とここで十六夜がセイバーに向かって質問を投げかける
「なぁセイバーって言っていたがそれ本名じゃあないだろ？」
その通りだがこの者達は信用できないそれに落ちてくるときに頭によぎったあの言葉に従うべきだと勘が言っている。
「その通り本名じゃあないですよまだ私は貴方達を信用できませんし」
「ふーん、じゃあ俺たちが信用に値するなら教えてくれるんだな」
「ええ、そのときは必ず」

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねぇんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねぇのか？」
「そうね。何の説明もないままでは動きようがないもの」
「……。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」
（全くです）
黒ウサギがこっそりツッコむ。
「――仕方ねえな。こうなったら、そこに隠れている奴にでも聞くか？」
物陰に隠れていた黒ウサギは立ち上がろうとしていたのを咄嗟に止め、もう一度しゃがみ込む。
四人の視線が黒ウサギが隠れる物陰に集まる。
「なんだ、貴方も気づいてたの？」
「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの二人も気づいてたんだろ？」
「風上に立たれたら嫌でも分かる」
「あんな視線に気づかなければ新選組失格です」
「……へぇ？面白いなお前ら」
軽薄そうな笑みを浮かべてはいるものの、十六夜の目は笑っていない。三人は理不尽な招集を受けた腹いせに、殺気の籠った冷ややかな視線を物陰に向ける。
黒ウサギは怯みつつも何とかその姿を見せる。
「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」
「断る」
「却下」
「お断りします」
「ご勝手にどうぞ～」

「あっは、取りつくシマもないですね♪」
両手をあげて、降参とでも言うようなポーズを取る黒ウサギ。
しかしその行動とは裏腹に、その赤い瞳は冷静に四人を値踏みしていた。
(肝っ玉は及第点。この状況でＮＯと言える勝ち気は買いです最後の人は断ったかどうかわからないですが。まあ、扱いにくいのは難点ですけども)
黒ウサギがおどけつつも、四人にどう接するべきかを冷静に考えていると、耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立って、黒いウサ耳を根っこから鷲掴む。すると
「えい」
「フギャ!」
力任せに引っ張った。
黒ウサギから情けない悲鳴が上がる。
「ちょ、ちょっとお待ちを! 触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか?!」
「好奇心のなせる業」
「自由にも程があります!」
大人しいのかと思えば違った。彼女は意外と行動派だ。
「へえ? このウサ耳って本物なのか?」
「……」
今度は十六夜が右から掴んで引っ張る。
「……。じゃあ私も」
「ちょ、ちょっと待――!」
耀が放した左の耳を飛鳥が。左右に力いっぱい引っ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げた。

不憫な黒うさぎ

「あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきっとこのような状況を言うに違いないのデス」
「…結構気持ちよかった？」
「いいからさっさと続けろ」
　本気で泣きそうになりながらも、黒ウサギはなんとか話を聞いてもらえる状況を作る事に成功した。四人は黒ウサギとほど近い岸辺に思い思いに腰かけ、彼女の話を『聞くだけ聞こう』という程度には耳を傾けている。
　黒ウサギは気を取り直してコホンと一つ咳払いをして、両手を広げた。
「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！ようこそ〝箱庭の世界〟へ！我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼンさせていただこうかと召喚いたしました！」
「ギフトゲーム？」
「そうです！既に気づいていらっしゃるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその〝恩恵〟を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！
　黒ウサギは大きく両手を広げて箱庭をアピールする。飛鳥が質問の為に挙手した。
「まず初歩的な質問からしていい？貴女の言う〝我々〟とは貴女を含めた誰かなの？」
「ＹＥＳ！異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある〝コミュニティ〟に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」
「属していただきます！そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの〝主催者〟が提示した商品をゲットできるというとてもシンプルな構造となっております」
「……〝主催者〟って誰？」
「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として、前者は自由参加が多いですが〝主催者〟が修羅神仏なだけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。〝主催者〟次第ですが、新たな〝恩恵ギフト〟を手にすることも夢ではありません。
　後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらはすべて〝主催者〟のコミュニティに寄贈されるシステムです」
「後者は結構俗物ね……チップには何を？」
「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間……そしてギフトを賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑む事も可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然――ご自身の才能も失われるのであしからず」
　愛嬌たっぷりの笑顔に黒い影を見せる黒ウサギ。
　挑発的にも見えるその笑顔に、同じく挑発的な声音で飛鳥が問う。
「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらっていいかしら？」
「どうぞどうぞ♪」
「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」
「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内に登録していただければＯＫ！商店街でも商店が小規模なゲームを開催しているので、よかったら参加していってくださいな」
　飛鳥は黒ウサギの説明に片眉を上げた。
「……つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

飛鳥の指摘に、お?と少々大袈裟とも思える程に驚く黒ウサギ。
「ふふん。なかなか鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもってのほか!そんな不逞な輩は悉く処罰します――が、しかし!『ギフトゲーム』の本質は全く逆!一方の勝者だけが全てを手に入れるシステムです。店頭に置かれている商品も、店側が示したゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だということですね」
「そう。中々野蛮ね」
「ごもっとも。しかし、〝主催者〟は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌なら初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」
一通りの説明を終えたのか、黒ウサギは一枚の封書を取り出した。
「さて、皆さんを召喚依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それらを全て語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニティでお話しさせていただきたいのですが……よろしいですか?」
「待てよ。俺達がまだ質問してないだろ」
今まで静聴していた十六夜が、威圧的な声を上げて立ち上がる。ずっと浮かべていた軽薄そうな笑顔が消えている事に気付いた黒ウサギは、構える様に姿勢を正した。
「……どういった質問です?ルールですか?ゲームそのものですか?」
「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かってルールを問いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのはたった……一つ、手紙に書いてあったことだけだ」
十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の三人を見回して、巨大な天幕によって覆われた都市に向ける。

「この世界は……面白いか？」
その紫水晶を思わせる瞳は静かに、冷ややかに、そして何もかもを見下すように。ただ一言問いかけた。
「――――」
他の三人も、無言で返事を待つ。
『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に来い』と。
彼らを呼んだ手紙には、確かにそう書かれていた。
それに見合うだけの催し物があるかどうか。それこそが、四人にとって最も重要な事だった。
「――ＹＥＳ。『ギフトゲーム』は人を超えた者達だけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

――箱庭二一〇五三八〇外門。ペリベッド通り、噴水広場前。
箱庭の外壁と内側を繋ぐ石造りの階段に座り込む少年の耳に、明るい少女の声が届いた。
「ジン坊ちゃーン！新しい方を連れて来ましたよー！」
聞き慣れた黒ウサギの声に、階段に座り込んでいた少年――ジンがはっと顔を上げた。
「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性二人が？」
「はいな、こちらの御四人様が――」
クルリ、と振り返った黒ウサギは、カチン、と固まった。
「……え？あれ？あと二人いませんでしたっけ？ちょっと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から〝俺問題児！〟ってオーラを放っている殿方と、何やらハイカラな和服に身を包んだ凛とした感じの女剣士様は？」
「ああ、十六夜君とセイバーさんのこと？二人なら〝ちょっと世界の果てを見てくるぜ！〟と言って駆け出して行ったわ。あっちの方に」
指さす先にあるのは、上空４０００ｍから見えた断崖絶壁。

街道の真ん中で呆然となった黒ウサギは、ウサ耳を逆立てて二人に慌てて問いただした。
「な、なんで止めてくれなかったんですか！」
「〝止めてくれるなよ〟と言われたもの」
「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか!?」
「〝黒ウサギには言わないで〟と言われたから」
「嘘です、絶対嘘です！実は面倒くさかっただけでしょう御二人さん！」
「うん」
ガクリと前のめりに倒れた黒ウサギ。新たな人材に心躍らせていた数時間前の自分がとてつもなく妬ましい。
まさかこんな問題児ばかり掴まされるとは思ってもいなかった。これはもう嫌がらせだろう。
そんな黒ウサギとは対照的に、ジンは蒼白になって叫んだ。
「た、大変です！〝世界の果て〟にはギフトゲームのために野放しにされている幻獣が」
「幻獣？」
「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に〝世界の果て〟付近には強力なギフトを持ったものがいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」
「あら、それは残念。もう彼らはゲームオーバー？」
「ゲーム参加前にゲームオーバー？……斬新！」
「冗談を言ってる場合じゃありません！」
ジンは必死になって事の重大さを訴えるが、幻獣の恐ろしさなど微塵も知らない二人は肩を竦めるばかりだ。
黒ウサギは深いため息を吐きつつ立ち上がった。
「はあ……ジン坊ちゃん。申し訳ありませんが、御二人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」
「わかった。黒ウサギはどうする？」
「問題児達を捕まえに参ります。事のついでに――〝箱庭の貴族〟と謳われる黒ウサギを馬鹿にした事、骨の髄まで後悔させてやります」

悲しみから立ち直った黒ウサギは怒りのオーラを全身から噴出させ、艶のある黒髪を桜色に染めていく。外門めがけて空中高く飛び上がった黒ウサギは、外門のあった彫像を次々駆け上がり、外門の柱に水平に張り付いて一言。
「一刻程で戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフをご堪能くださいませ！」
桜色の髪を戦慄かせた黒ウサギは、踏み締めた門柱に亀裂が入るほどの脚力で、まるで弾丸の様に飛び去った。あっという間に三人の視界から消えてしまう。
「……。箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」
「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが…」
そう、と飛鳥は空返事して、心配そうにしているジンを振り返った。
「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださるのかしら？」
「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願いします。二人の名前は？」
「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」
「春日部耀」
ジンが十一とは思えない丁寧な自己紹介をする。飛鳥と耀もそれに倣って一礼した。
「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね、軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」
飛鳥はジンの手を取ると、明るく胸躍るような笑顔で箱庭の外門をくぐった

ギフトゲームをするそうですよ！

　セイバーと十六夜は森の中を走っていた。普通の人間にとってその速度はありえない速度ではあったが確かに二人は走っていた。
「ヤハハハハ、結構早く走れるんだなぁセイバー」
「十六夜さんこそ本気じゃないですよねそれ」
「やっぱわかるかまぁもっと速く走ることはできるぜ」
　と喋りながら走っていると滝が見えてきた
「ふーん、良い景色じゃねぇか」
　森に囲まれた湖とそこに落ちている滝が幻想的な風景を作り出していた。
　その景色を眺めていると
「ここに人間が来るのは何年振りだぁ」
「我ら蛇神が貴様らを試してやろう」
　と二匹の蛇が湖から現れた。通常このようなことが起こればたいていの人は腰を抜かしてしまうだろうしかしその蛇の前にいるのは常識が一切通用しない問題児と切らねば自分が死ぬという数多の任務をこなしてきた剣客、このようなことでは動じることはなかった。
「そうかじゃあ俺を試せるか、試させろ！」
　十六夜はそう言い放ち二匹いる蛇の片方を殴り飛ばした
「なっ、貴様ぁぁぁ！」
　もう片方の蛇が激昂し十六夜に向かっていくがそれを見逃すセイバーではない
「あなたの相手はこの私です」
　そう言い放ち蛇に刀を向ける
「せっかくですしギフトゲームをしましょう、内容はあなたと私で一対一の決闘を」
「その戯言が貴様の最後になるぞ」
「いえ、あなたのような弱者に負ける方が難しいかと」
〝蛇神との一騎打ち〟
　プレイヤー

・セイバー
・蛇神
勝負方法
上記のプレイヤー同士で戦う
勝利条件
・相手を戦闘不能にするｏｒ相手を殺す
敗北条件
・自分が戦闘不能になるｏｒ自分が死ぬ
宣誓
両者の合意のもとこのゲームを正式なものとする

両者の前に羊皮紙が現れる
「フハハハハ！小娘がわしにかなうわけなかろう。この神である私にただの人間がかｔ「シュッ」ＧＹＡＡＡＡａａａａａａａ！」
ギフトゲームが始まった直後大口を叩きだした蛇に向かい一筋の剣尖が走った。相手が小娘だと油断していた蛇にとってそれは意識を失うのには十分な一撃だった。
「やっぱり手応え無かったですね」
そう言うセイバーの手に一振りの刀が現れた
「これが報酬ですか、なかなかの業物ですね」
「へぇ、見ただけでわかるのか」
「これでも一応剣客ですから」
と話しているとちょうど黒うさぎたちが向かっていった方向から気配が近づいてきた
「黒うさぎですか？」
「もう！一体どこまで来ているんですか！ここは”世界の果て”ですよ！」
十六夜とセイバーを怒鳴りつけた。
「なかなか早いな。こんな短時間で俺に追いつけるなんて」
怒鳴られた十六夜に反省しているような様子は一切見られない。
「当然です！私は箱庭の貴族と謳われる黒ウ……　サギ……え？」

（黒ウサギが半刻以上もの時間追いつけなかった!?）
　黒ウサギはあまりの十六夜とセイバーの走力の高さに驚愕した。
「それよりも、終わりですか？」
「アレのことか？」
「まだだ…まだ試練は終わってないぞ小僧ォ!!」
　十六夜が後ろを指差すと怒り狂った白い大蛇が水の中から姿を現した。
「水神の眷属蛇神!?」
「別に、ただ偉そうに試練を選べとかなんとか上から目線で素敵なこと言ってくれたからよ、俺を試せるかどうか試させてもらった。結果は期待ハズレだったがな」
　十六夜はニヤリと笑って言った。
「そりゃ怒るに決まってます！何をやっちゃってくれてるんですか！」
「付け上がるなよ人間風情が！我がこの程度のことで倒れるものか!!」
「あなたの片割れは一撃で倒されましたけどね」
　蛇神は敵意を全面に出しにしている。
「助け、いります？」
「冗談！こいつは俺の喧嘩だぜ、それにお前は一匹と遊んだじゃねぇか俺にも遊ばせろ！黒ウサギもな！」
「了解です」
「ちょ！何言ってるんですか十六夜さん！相手は神格持ちなんですよ！それにセイバーさん、遊んだってどう言うことですかっ!!？」
「十六夜があの蛇を殴り飛ばしたらもう一匹の蛇が怒りだしたからギフトゲームをやって勝ちました」
「その心意気は買ってやろう！それに免じてこの一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる！」
「寝言は寝て言え！決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ！」
「フン！……その戯言が貴様の最期だ！」

蛇神は大量の水で１０ｍは超えるであろう巨大な水の竜巻を２本作りだしこちらに１本もう１本は十六夜のほうに放った。そして竜巻は十六夜を飲み込む。
「十六夜さん！　セイバーさん！」
「こっちまで巻き込まないでくださいよ。」
セイバーは落ち着いて刀を抜いた。
「ハっ！しゃらくせぇ!!」
十六夜は竜巻をたった一撃の拳で消し飛ばした。
「馬鹿な?!」
「セイバーさんは?!」
黒ウサギがセイバーのほうを向くと居合の型をとったセイバーが刀を振り抜き竜巻を切り裂いた
「嘘?!」
「ま、それなりには楽しめたぜ。あいつの力も見れたしな。これはその礼だ！」
十六夜は大地を蹴り蛇神の頭上に飛び上がり、
「グアッ!!」
蛇神を蹴り飛ばした。
その一撃で蛇神は倒れ伏し、辺り一帯に水飛沫が飛ぶ。
「全く……今日はよく濡れる日だ。クリーニング代ぐらいは出るんだよな？黒ウサギ」
「そんな……ありえません。デタラメです。」
黒ウサギは驚きを隠せなかった。神格を持った存在がただの一撃で倒されてしまったのだから。あと竜巻を斬ったセイバーの居合。
(信じられません…ですが本当に最高クラスのギフトを所持している！)
黒ウサギは思わず笑みを浮かべた。蛇神を素手で打倒した十六夜の力とセイバーのあの力があれば……悲願を達成することも夢ではないと希望を見出したが、
「こんな力がいる程なんですかねー？」
「へ？」

気が付けば、セイバーはじっと黒ウサギを見つめている。
「な、何のことでございましょう……？」
「じゃあ、あなたは何で私達を呼び出す必要があったんですか？」
「ああ、それは俺も聞きたいね」
表情には出さなかったものの、黒ウサギは激しく動揺した。
二人の問いは、黒ウサギが意図的に隠していたものだったからだ。
「それは……言った通りですよ？十六夜さん達にオモシロオカシク過ごしてもらおうと――」
「ああ、そうだな。俺も最初は純粋な好意か、もしくは与り知らない誰かの遊び心で呼び出されたんだと思っていた。俺は大絶賛、暇の大安売りしていたわけだし、セイバーはともかく、他の二人も異論が上がらなかったってことは、箱庭に来るだけの理由があるんだろうよ。だからオマエの事情なんて気にかからなかったが――俺には、黒ウサギが必死に見える」
その時、黒ウサギが動揺を顔に出してしまった。
真紅の瞳が揺らぎ、虚を衝かれたように十六夜を見つめ返す。
「これは俺の勘だが。黒ウサギのコミュニティは弱小のチームか、もしくは訳あって衰退したチームじゃ何かじゃねぇのか？だから俺達は組織を強化するために呼び出された。そう考えれば今の行動や、俺がコミュニティに入るのを拒否した時に強く拒否ことも合点がいく――どうよ？満点だろ？」
「っ！」
黒ウサギは内心で舌打ちした。この時点でそれを知られてしまうのは、彼女にとって余りにも手痛い。
苦労の末に呼び出した力を手放してしまうようなことは、何としてでも避けたかった。
「んで、この事実を隠していたってことはだ。俺達にはまだ他のコミュニティを選ぶ権利があると判断できるんだが、その辺どうよ？」
「どうですか？」
「……」
「沈黙は是也、だぜ黒ウサギ」

「話してくれませんか？」
十六夜は近くにあった手ごろな石に腰を下ろして聞く姿勢をとった。
セイバーは半身の姿勢に変え、黒ウサギを見つめる。
しかし黒ウサギにとって今のコミュニティの状態を話すのは余りにもリスクが大き過ぎる。
（せめて気づかれたのがコミュニティの加入承諾を取ってからならよかったのに！）
加入承諾を得た後なら、コミュニティの状況を知られても簡単に脱退することはできない。
なし崩しにコミュニティの再建を手伝ってもらうつもりだったのだが……何にせよくじ運が悪かった。相手は世界屈指の問題児集団と忌み子なのだ相手が悪い。
「ま、話さないなら話さないでいいぜ。俺はさっさと他のコミュニティに行くだけだ。お前はどうする？個人的にはお前の力に興味が湧いたから一緒にきてほしいんだが」
「元々、死ぬ直前でしたからやりたいことも特に無かったですしいいですよ」
「……話せば、協力していただけますか？」
「ああ、面白ければな」
十六夜はケラケラ笑うが、その目は一切笑っていない。
黒ウサギはようやく己が間違っていることに気がついた。黒ウサギの話を聞くだけだった二人の少女とは違い、この二人は箱庭の世界を見定めるのに真剣だったのだと。でなければ、黒ウサギの動揺に気づけるわけがなかった。
「……わかりました。それではこの黒ウサギもお腹を括って、精々オモシロオカシク、我々のコミュニティの惨状を語らせていただきます。」
黒ウサギは、コホンと一つ咳払いして内心半分以上自棄やけっぱちだった。

「まず私達のコミュニティには名乗るべき名がありません。よって呼ばれる時は名前のないその他大勢ノーネームという蔑称で称されます」
「へえ……その他大勢もその扱いかよ。それで？」
「次に私達にはコミュニティの誇りである旗印もありません。この旗印というのはコミュニティのテリトリーを示す大事な役割も担っています」
「はい。」
「名と旗印に続いて、中核を成す仲間達は一人も残っていません。もっと言っててしまえば、ゲームに参加できるだけのギフトを持っているのは一二二人中、黒ウサギとジン坊ちゃんだけで、後は十歳以下の子供ばかりなのですヨ！」
「もう崖っぷちだな！」
「ホントですねー♪」
　十六夜の冷静な言葉に最初こそ明るく笑うものの、ガクリと膝をついて項垂れる黒ウサギ。ただの空元気だったらしい。いざ口に出してみると、本当に自分達のコミュニティが崖っぷちと思わずにはいられなかった。
「で、どうしてそうなったんだ？」
「叛逆ですか？」
　黒ウサギは項垂れたまま力なく首を振る。
「いえ、彼らの親も全て奪われたのです。箱庭を襲う最大の天災――魔王によって」
　魔王――その単語を聞いた途端、適当に相槌を打つだけだった十六夜が声を上げた。
「ま……マオウ!?」
「？」
　その瞳はまるで子供のように輝いている。さらに具体的に言うと、まるで新しい玩具を目の前にした子供のような瞳でありとてもとても輝いている。
　十六夜の変わり様に隣で聞いていたセイバーは疑問符をあげた。

「魔王！なんだよそれ、魔王って超カッコイイじゃねえか！箱庭には魔王なんて素敵なネーミングで呼ばれる奴がいるのか!?」
「え、ええまあ。けど十六夜さんが思い描いている魔王とは差異があるかと…」
「そうなのか？けど魔王なんて名乗るんだから強大で凶悪で、全力で叩き潰しても誰からも咎められることの無いような素敵に不敵にゲスい野郎なんだろ？」
「ま、まあ…倒したら多方面から感謝される可能性はございますし倒せば条件次第で隷属させることも可能です。」
「へえ？」
「魔王は主催者権限ホストマスターという箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼らにギフトゲームを挑まれたら最後、誰も断ることはできなせん。私達は主催者権限を持つ魔王のゲームに強制参加させられ、コミュニティは……コミュニティとして活動していく為に必要な全てを奪われてしまいました」
　これもまた比喩ではない。黒ウサギ達のコミュニティはその地位も名誉も仲間も、全てを奪われた。彼女達に残されたのは、廃墟と子供達だけである。
　しかし十六夜はそんなコミュニティの状況に同情する様子もなく、岩の上で足を組み直した。
「けど名前も旗印も無いというのは不便な話だな。何より縄張りを主張できないのは手痛いだろ」
「潰して作ればいいじゃないですか？」
「そ、それは……。」
　二人の指摘に黒ウサギは言い淀む。その指摘は正しい。
　名も旗印もないコミュニティは誇りを掲げることもできず、名に信用を集めることもできない。この箱庭の世界において名と旗印がないということは、周囲に組織として認められないということに他ならないだが
　だからこそ、黒ウサギたちは望みを賭けた。異世界からの同士の召喚という最終手段に。

「か、可能です。ですが改名はコミュニティの完全解散を意味します。しかしそれでは駄目なのです！私達は何よりも……仲間達が帰ってくる場所を守りたいのですから！」
仲間の帰ってくる場所を守りたい。それは黒ウサギの本心だった。出会ってから初めて口にした、彼女の偽りない思いだった。
魔王とのゲームによって居なくなった仲間達が帰る場所を守るため、彼女達はどれだけ周囲に蔑まれることになろうとも、コミュニティを守るという誓いを立てた。
「修羅の道ではあります。けど私達は仲間が帰る場所を守りつつ、コミュニティを再建し……いつの日か、コミュニティの旗印を取り戻して掲げたいのです。そのためには十六夜さんや詩姫さんのような強大な力を持つプレイヤーを頼るほかありません！どうかその強大な力、我々のコミュニティに貸していただけないでしょうか？！」
「……ふぅん。魔王から誇りと仲間をねえ」
「仲間……　誇り……」
その言葉にセイバーは後ろめたい気持ちになる、病気だったとはいえ最後まで仲間と戦えなかった、誠の文字を最後まで背負えなかった、さらには仲間に別れを告げずにここに消えたこと、それは彼女の心に大きな溝を作っていた。
「お願いします‼？」
深く、深く頭を下げて懇願する。だが、必死の告白にも関わらず十六夜は気のない声で、セイバーは顔を俯かせていた。その態度は黒ウサギの話を聞いていたとは思えない、黒ウサギは頭を下げたまま肩を落とし、泣きそうになっていた。
（ここで断られたら……私達のコミュニティはもう……！）
黒ウサギは血が出てしまうのではないかというほど強く唇を噛む。こんなことになるなら最初から全て話せばよかったという後悔が彼女を苛む。
十六夜は組んだ足をだるそうに組み直し、たっぷり黙り込んだ後、
「いいな、それ」
「……　……は？」

「は？じゃねえよ。協力するって言ったんだ黒ウサギ」
　不機嫌そうに言う十六夜。呆然と立ち尽くす黒ウサギ。
「そんな流れでございました？」
「そんな流れだったぜ。それとも俺がいらねえのか？失礼なこと言うと本気で余所行くぞ。」
「だ、駄目です！駄目です！絶対に駄目です！十六夜さんは私達に必要です！」
「素直でよろしい。で？お前はどうするんだ？」
「私は……。」
　今の流れで黒ウサギはすっ飛んでいたようだが、セイバーは返答していない。いや返答ができなかった。
　セイバーは迷っていた、前とは違う世界に来ているのは確かだがこのまま彼らに協力してもまた最後まで戦えずに他の仲間に迷惑がかかってしまう恐れがあるからだ。
　十六夜の了承に嬉しそうに顔を綻ばせていた黒ウサギが、不安げな顔に戻る。
「セイバーさん……」
「私は…　コフッ」
「セイバー⁉？」
「セイバーさん⁉？」
　返事を返そうとした時セイバーは吐血した。いくら体の調子が良くなっていたとはいえ病気が治っていたわけではない、ただ症状が軽くなっていただけなのだ。
（あぁ、やはりこのままではみんなに迷惑がかかってしまいますね…）
「大丈夫かセイバー？」
「いえ、ちょっと発作が起こっただけですので大丈夫です」
「本当に大丈夫なんですか？」
「はい、それとさっきの返答ですが断らせてください」
「えっ…」
「私にはあなた方をたｓ「それってお前が他の人に迷惑がかかるから

だよな」ッツ」
「そんな理由じゃ納得しねぇよ仲間に迷惑がかかる?上等だ仲間になるんだったらそれくらい当たり前だろうが」
「その通りです」
　その言葉は乱暴な物言いだがセイバーにとって救われる言葉だった
「ありがとうございます。私はあなたのコミュニティに入ります」
「よし決まったな。ほれ、あの蛇起こしてさっさとギフトを貰って来い。その後は川の終端にある滝と世界の果てを見に行くぞ」
「は、はい!」

階層支配者に喧嘩を売るそうですよ

二人が倒した2匹の蛇からギフトをもらい世界の果てを見にいった後、先に箱庭の中に来ていた飛鳥たちと落ち合った。
そして飛鳥たちから黒うさぎがいなかった時のことを聞き黒うさぎの絶叫が走った。
「何やっちゃってるんですか‼?‼?‼?‼?‼?」
「むしゃくしゃしてやった！後悔も反省もしていない！」
「なに堂々と言い張ってるんですか！」スパァン
飛鳥たち曰く、その相手はものすごい外道らしい。悪ならば即斬りたいところだが飛鳥たちは私たちを参加させる気は無さそうだった
「まぁ、いいです十六夜さんたちが参加するならば勝利するでしょうし」
「なに言ってんだ黒うさぎ俺たちは参加しねぇぞ」
「ええ、あなたたちは参加させないわ」
やっぱり思った通りです
「ダメですよ！同じコミュニティ同士協力しないと」
「お前こそなに言ってるんだこれは奴らが売った喧嘩だろ、そこに俺らが出て行くのは無粋ってもんだ」
「あらわかってるじゃない」
「はぁ、もう勝手にしてください」
「それじゃあ今日はコミュニティへ帰る？」
「あ、ジン坊っちゃんは先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら〝サウザンドアイズ〟に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと。この水樹の事もありますし。」
四人は首を傾げて聞き直す。
「〝サウザンドアイズ〟？コミュニティの名前か？」
「ＹＥＳ。〝サウザンドアイズ〟は特殊な〝瞳〟のギフトを持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし。」

「ギフト鑑定というのは？」
「勿論、ギフトの秘めた力や根源などを鑑定することデス。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出処は気になるでしょう？」
　同意を求める黒ウサギに四人は複雑な表情で返す。思うことはそれぞれあるのだろうが、拒否する声はなく、黒ウサギ・十六夜・飛鳥・セイバー・耀の五人と一匹は〝サウザンドアイズ〟に向かう。
　道中、十六夜・飛鳥・セイバー・耀の四人は興味深そうに街並みを眺めていた。
　商店へ向かうペリベッド通りは石造で整備されており、脇を埋める街路樹は桃色の花を散らして新芽と青葉が生え始めている。
　日が暮れて月と街灯ランプに照らされている並木道を、飛鳥は不思議そうに眺めて呟く。
「桜の木・・・ではないわよね？花弁の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの。」
「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合の入った桜が残っていてもおかしくないだろ。」
「・・・？今は秋だったと思うけど。」
「霜月の頃だったから桜はまだ先では？」
　ん？っと噛み合わない四人は顔を見合わせて首を傾げる。黒ウサギが笑って説明した。
「皆さんそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所かしょがあるはずですよ？」
「それは、パラレルワールド・・・だったかしら？」
「近しいですね。正しくは立体交差並行世界論というものなのですけれども・・・今からコレの説明を始めますと一日二日では説明しきれないので、またの機会ということに。」
　曖昧あいまいに濁して黒ウサギは振り返る。どうやら店に着いたらしい。商店の旗には、蒼い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されている。あれが〝サウザンドアイズ〟の旗なのだろう。

日が暮れて看板を下げる割烹着かっぽうぎの女性店員に、黒ウサギは滑り込みでストップを、
「まっ「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません。」・・・」
・・・ストップをかけることも出来なかった。黒ウサギは悔しそうに店員を睨みつける。
流石は超大手の商業コミュニティ。押し入る客の拒み方にも隙がない。
「なんて商売っ気の無い店なのかしら。」
「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」
「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です。」
「出禁⁉これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ⁉」
キャーキャーと喚く黒ウサギに、店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応する。
「なるほど〝箱庭の貴族〟であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」
「・・・う。」
一転して言葉に詰まる黒ウサギ。しかし十六夜は何の躊躇いもなく名乗る。
「俺達は〝ノーネーム〟ってコミュニティなんだが。」
「ほほう。ではどこの〝ノーネーム〟様でしょう。よかったら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか？」
ぐっ、と黙りこむ。〝名〟と〝旗〟がないコミュニティのリスクとはまさにこういう状況のことだった。
（ま、まずいです。〝サウザンドアイズ〟の商店は〝ノーネーム〟お断りでした。このままだと本当に出禁にされるかも。）
力のある商店だからこそ彼らは客を選ぶ。信用出来ない客を扱うリスクを彼らは冒さない。
全員の視線が黒ウサギに集中する。彼女は心の底から悔しそうな

顔をして、小声で呟いた。
「その・・・あの・・・私達に、旗はありま
「いいいいやほおおおおおお!久しぶりだ黒ウサギイイイイ!」
黒ウサギは店内から爆走してくる着物風の服を来た真っ白い髪の少女に抱き（もしくはフライングボディアタック）つかれ、少女とともにクルクルクルクルクと空中四回転半ひねりをして街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛んだ。
「きゃあーーーーー・・・・・・・・!」
ボチャン。そして遠くなる悲鳴。
セイバー達は眼を丸くし、店員は痛そうな頭を抱えていた。
「・・・おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか?なら俺も別バージョンで是非」
「ありません。」
「なんなら有料でも。」
「やりません。」
「じゃあセイバー俺に飛びつけ」
「やるわけないじゃないですか・・・」
そのようなふざけたやり合いをしているとフライングボディアタックで黒ウサギを強襲した白い髪の少女は、黒ウサギの胸に顔を埋めてなすりつけていた。
「し、白夜叉様!?どうして貴女がこんな下層に!?」
「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろに!フフ、フホホフホホ!やっぱりウサギは触り心地が違うのう!ほれ、ここが良いかここが良いか!」
スリスリスリスリ。
「し、白夜叉様!ちょ、ちょっと離れてください!」
白夜叉と呼ばれた少女を無理やり引き剥がし、頭を掴んで店に向かって投げつける。
くるくると縦回転した少女を、十六夜は足でセイバーの方へ蹴飛ばし、彼女は腰に下げていた剣で切った。
もちろん峰打ちである

「そらっ。」
「ハァッ」
「ゴバ――グフッ！お、おんしら！飛んできた初対面の美少女を足で蹴飛ばし、あまつさえ峰打ちとはいえ斬るとは何様だ！」
「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ。」
「セイバーです」
ヤハハと笑う十六夜と、呆れているセイバーが自己紹介をした。
この一連の流れに呆気にとられていた飛鳥は、思い出したように白夜叉に話しかける。
「貴女はこの店の人？」
「おお、そうだとも。この〝サウザンドアイズ〟の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢のわりに発育が良い胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ。」
「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります。」
「〝ノーネーム〟だとわかっていながら名を尋ねる、性悪店員に対する詫びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ。」
む、っと拗ねるような顔をする女性店員。彼女にしてみればルールを守っただけなのだから気を悪くするのは仕方がない事だろう。女性店員に睨まれながら暖簾のれんをくぐった五人と一匹は、店の外観からは考えられない、不自然な広さの中庭に出た。
正面玄関を見れば、ショーウィンドに展示された様々な珍品ちんぴん名品が並んでいる。
「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ。」
五人と一匹は和風の中庭を進み、縁側で足を止める。
障子を開けて招かれた場所は香の様な者が焚かれており、風とともに五人の鼻をくすぐる。
個室というにはやや広い和室の上座に腰を下ろした白夜叉は、大きく背伸びをしてからセイバー達に向き直る。気がつけば、彼女の服はいつの間にか乾ききっていた。
「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に

本拠を構えている〝サウザンドアイズ〟幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があってな。コミュニティが崩壊してからもちょくちょく手を貸してやってる器の大きな美少女と認識しておいてくれ。」
「はいはい、お世話になっております本当に。」
投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。その隣で耀が小首を傾げて問う。
「その外門、ってなに？」
「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです。」
此処、箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴ってそれぞれを区切る門には数字が与えられている。
外壁から数えて七桁の外門、六桁の外門、と内側に行くほど数字は若くなり、同時に強大な力を持つ。箱庭の四桁の外門ともなれば、名のある修羅神仏しゅらしんぶつが割拠する完全な人外魔境だ。
黒ウサギが描く上空から見た箱庭の図は外門によって幾重もの階層に分かれている。
その図を見た四人は口を揃えて、
「・・・超巨大タマネギ？」
「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」
「そうだな。どちらかというとバームクーヘンだ。」
「ばぁむくぅへん、とはなんだ？」
「「バームクーヘンを知らない・・・ だと・・・」」
十六夜たちの例え話にセイバーは首を傾ける
そんなセイバーにその場にいた全員が反応する
「バームクーヘンを知らないなんて人生損している・・・」
「おい白夜叉、こいつにバームクーヘンを用意しろ」
「すぐに用意させよう」
「えっ？・・・ えっ？」
自分を置き去りに行動する十六夜たちにセーバーは戸惑いを隠せない

そしてセーバーの前にバームクーヘンが用意された
「食べながらでいい話を進めよう。今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は〝世界の果て〟と向かい合う場所になる。あそこにはコミュニティには所属してはいないものの、強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ――その水樹と刀の持ち主などな。」
白夜叉は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗と一振りの刀に視線を向ける。白夜叉が指すのはトリトニスの滝を棲み家にしていた蛇神のことだろう。
「して、一体誰が、どのようなゲームで買ったのだ？知恵比べか？勇気を試したのか？」
「いえいえ。この水樹は十六夜さんとセイバーさんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ。」
自慢気に黒ウサギが言うと、白夜叉は声を上げて驚いた。
「なんと!?クリアではなく直接的に倒したとな!?ではその童達は神格持ちの神童か？」
「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格なら一目見れば分かるはずですし。」
「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人では月とスッポンだぞ。」
神格とは生来の神様そのものではなく、種の最高ランクに体を変幻させるギフトを指す。
蛇に神格を与えれば巨軀の蛇神に。
人に神格を与えれば現人神や神童に。
鬼に神格を与えれば天地を揺るがす鬼神と化す。
更に神格を持つことで他のギフトも強化される。箱庭にあるコミュニティの多くは各々の目的のために神格を手に入れることを第一目標とし、彼らは上層を目指して力をつけているのだ。
「白夜叉様はあの邪神様とお知り合いだったのですか？」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの。」
小さな胸を張り、呵々と豪快に笑う白夜叉。
だが、ソレを聞いた十六夜は物騒に瞳を光らせて問いただす。
「へえ？じゃあオマエはあのヘビより強いのか？」
「ふふん、当然だ。私は東側の〝階層支配者〟だぞ。この東側の４桁以下にあるコミュニティでは並ぶ者がいない、最強の主催者ホストなのだからの。」
〝最強の主催者〟――その言葉に、十六夜・飛鳥・耀の三人は一斉に瞳を輝かせた。
「そう・・・ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリアできれば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかしら？」
「無論、そうなるのう。」
「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた。けど、セイバー。お前はやらないのかよ？」
と十六夜はセイバーの方を向くそこにはバームクーヘンを頬張り満面の笑みを浮かべているセイバーがいた
まだ食ってたのかよ。と呆れた様子でつぶやいた十六夜は、他二人と同じ、剥き出しの闘争心を視線に込めて白夜叉を見る。白夜叉はそれに気づいたように高らかと笑い声を上げた。
「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと？」
「え？ちょ、ちょっと御三人様!?」
慌てる黒ウサギを右手で制す白夜叉。
「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている。」
「ノリがいいわね。そういうの好きよ。」
「ふふ、そうか。――しかし、ゲームの前に一つ確認しておく事がある。」
「なんだ？」
白夜叉は着物の裾から〝サウザンドアイズ〟の旗印――向かい合

う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、

「おんしらが望むのは〝挑戦〟か――もしくは〝決闘〟か？」

刹那、四人の視界に爆発的な変化が起きた。

四人の視覚は意味を無くし、様々な情景が脳裏で回転し始める。

脳裏を掠めたのは、黄金色の穂波が揺れる草原。白い地平線を覗く丘。森林の湖畔。記憶に無い場所が流転を繰り返し、足元から四人を呑み込んでいく。

四人が投げ出されたのは、白い雪原と凍る湖畔――そして、【水平に太陽が廻る世界だった】。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は〝白き夜の魔王〟――――太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への〝挑戦〟か？それとも対等な〝決闘〟か？」

魔王・白夜叉。少女の笑みとは思えぬ凄味に、再度息を呑む三人。

〝星霊〟とは、惑星級以上の星に存在する主精霊を指す。妖精や鬼・悪魔などの概念の最上級種であり、同時にギフトを〝与える側〟の存在でもある。

十六夜は背中に心地いい冷や汗を感じ取りながら、白夜叉を睨んで笑う。

「水平に廻る太陽と・・・そうか、白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現してるってことか」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私が持つゲーム盤の一つだ」

白夜叉が両手を広げると、地平線の彼方の雲海が瞬く間に裂け、薄明に太陽が晒される。

〝白夜〟の星霊。十六夜の指す白夜とは、フィンランドやノルウェーといった特定の経緯に位置する北欧諸国などで見られる、太陽が沈まない現象である。

そして〝夜叉〟とは、水と大地と神霊を指し示すと同時に、悪神としての側面を持つ鬼神。

数多の修羅神仏が集うこの箱庭で、最強種と名高い〝星霊〟にして〝神霊〟。
彼女はまさに、箱庭の代表とでもいえるほど――強大な〝魔王〟だった。
「これだけ莫大な土地が、ただのゲーム盤・・・!?」
「如何にも。して、おんしらの返答は?〝挑戦〟であるならば、手慰てなぐさみ程度に遊んでやる。――だがしかし、〝決闘〟を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか」
「・・・っ」
飛鳥と耀、そして自信家の十六夜でさえ即答できずに返事を躊躇った。
白夜叉が如何なるギフトを持つかは定かではない。だが勝ち目がないことだけは一目瞭然だ。しかし、自分達が売った喧嘩を、このような形で取り下げるにはプライドが邪魔した。
しばしの静寂の後――諦めたように笑う十六夜が、ゆっくりと手を挙げ、
「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」
「ふむ?それは決闘ではなく、試練を受けるということかの?」
「ああ。これだけのゲーム盤を用意できるんだからな。アンタには資格がある。――いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」
苦笑ともに吐き捨てるような物言いをした十六夜を、白夜叉は堪え切れず高らかと笑い飛ばした。プライドの高い十六夜にしては最大限の譲歩なのだろうが、『試されてやる』とは随分可愛らしい意地の張り方があったものだと、白夜叉は腹を抱えて哄笑を上げた。
一頻り笑った白夜叉は笑いを噛み殺して他の二人にも問う。
「く、くく・・・して、他の童達も同じか?」
「・・・ええ。私も、試されてあげていいわ」
「右に同じ」
苦虫を噛み潰したような表情で返事をする二人。満足そうに声を上げる白夜叉。
一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホッと胸を撫

で下ろす。
「も、もう！お互いにもう少し相手を選んでください！〝階層支配者〟に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う〝階層支配者〟なんて、冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!」
「何？じゃあ元・魔王様ってことか？」
「はてさて、どうだったかな？」
ケラケラと悪戯っぽく笑う白夜叉。ガクリと肩を落とす黒ウサギと三人。
白夜叉は、思い出すようにセイバーの方へ振り向いた。
「おっと、おんしにはまた別のゲームを用意するつもりだ…　って、いつまでバームクーヘンを食べてるつもりだ！」
「ん？…　ってうわぁぁここ何処ですか！」
「気づいてなかったのかよ」
「まぁよい。早速ゲームを始めるかの」
その時、彼方にある山脈から甲高い叫び声が聞こえた。